

榎本保郎先生の「旧約聖書一日一章」と共に読む

# 創世記 1章

## ◆ 思い巡らしてみよう・黙想

- 心に届いたみ言葉
- ふと、気が付いたこと
- こころの扉をノックされたこと
- 安心したこと
- うれしくなったこと
- 困ったこと・宿題
- 自分に語られていること
- 誰かに伝えてあげたいこと
- 私たちの教会に示されたこと
- この時代への呼びかけ
- 考えさせられたこと
- 「悔い改め」を迫られたこと
- イエスさまの姿が見えた来た箇所

## 【メモ】

## ◆ 比べてみよう 訳の違い

### 創世記 1章2節

- 2017 地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。
- LB 地球はまだ形が定まらず、やみにおおわれた水の上を、さらに神様の霊がおおっていました。
- 70人訳 地は見えるものでも形あるものでもなく、闇が深淵の上にある、神の霊（「神の息」「神の風」）が水の上を漂っていた。
- フラ 地はむなしく何もなかった。闇が深淵の上にある、神の霊が水の上を覆うように舞っていた。
- 岩波 地は空漠として、闇が混沌の面にあり、神の霊がその水の面に働きかけていた。
- 新共 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。

### 創世記 1章27節

- 口語 神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。
- 2017 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。
- LB このように、人間は、天地を造った神様に似た者として造られました。神様はご自分に似せて人間を造り、男と女とに造ったのです。
- 70人訳 神は人間をつくった、神の姿に人間をつくった。彼らを男と女につくった。
- 現代 神はこのように、人をご自分に似せて、理性と道徳をわきまえる不滅の霊を持つ者として創造された。また、男と女として造られた。

- フラ 神はご自分にかたどって人を創造された。人を神にかたどって創造され、男と女とに創造された。
- 岩波 神は自分の像（かたち）に創造した。神の像にこれを創造した。彼らを男と女とに創造した。
- 関根 そこで神は人をご自分の像の通りに創造された。神の像の通りに彼を創造し、男と女に彼らを創造した。
- 新共 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。
- NIV So God created man in his own image,in the image of God he created him; male and female he created them.

## 創世記 1章31節

- 2017 神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日。
- 現代 神はお造りになったすべてのものをご覧になった。それは、すばらしいものであった。これが第六になされたことであった。
- フラ 神はご自分がお造りになったすべてのものをご覧になった。それは極めて善かった。そして夕べとなり朝となり、六日目過ぎた。
- 70人訳 神は自分がつくったものをすべてを見た。見よ、（それらは）非常に美しかった。夕方となり、ついで朝となった。第六日。
- 新共 神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。
- NIV God saw all that he had made, and it was very good. And there was evening, and there was morning--the sixth day.

## ◆ み言葉をふくらませます

(ア) 1節の「創造する」 ※フランススコ会訳 註より

原語は「バラー」(1:21、27、2:3、5:12、6:7も同じ)。このヘブライ語は神の場合にだけ用いられ、言葉または意志によって造るという意味。

(イ) 讚美歌 21 より

330 番 「神の霊が」

58 番 「み言葉をください」

(ウ) 「光あれ」を、ヨハネ福音書と併せて読む

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

8:12 イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

(エ) 人は地を這うものをすべて「支配」できるのか？

奥田知志 説教集 『ユダよ、帰れ』からのヒント

「人であり続けるために — 最後の被造物・人間」

(オ) 【 it was very good 】 という宣言の恵み

「五十歩百歩」でもなく、「そこそこ」でも「ますます」でもない  
実によい、最高！と喜ばれる神

以上